

編集後記

一昨年春、矢作川に近年希にみる天然アユの遡上がありました。漁業関係者、釣師は勿論のこと、多くの人たちが感動を覚え、ここ数十年見放されていた川に人々の目が向けられました。矢作川もまだ大丈夫と思われた方や、荒れていた川の復活を感じた方もいました。しかし、大量遡上にもかかわらず、アユは釣れません。釣果だけで判断するのは無謀かも知れませんが、矢作川は予想以上に何か根本的なところに病的な症状が出ているのかも知れません。その病状を探るため、研究所では来年度より自然科学と社会科学を総合的に把握するための調査研究を始めます。

この研究は、河川内でも病状が進んでいるダム直下流区域において、自然生態系のメカニズムを解明するとともに、川と関わってきた人たちの生産活動や歴史、文化をつきあわせて河川に表れる変化を解明して、総合的に河川の復元を図るものです。

この研究で大切なことは、そこに住む人の知恵を重視すること、事業化を前提にしたものであること、科学的な要素分析と総合化を繰り返すこと、研究者・関係行政・企業・地元の人々が共同で調査研究して議論することにあります。その結果として生態系回復の事業化を目指す「矢作川モデル」を提起したいと考えています。

このような水中から陸上の生態系と人の関わりを総合的にまとめるのは非常に難しいことだと思いますが、自然生態系と人々との暮らしの良好な接点を求めることが、当研究所の今後の重要な課題であり、積極的に取り組んでいかなければならないと思っております。

今後も、当研究所のさらなる充実を図るため、皆様方のご指導とご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、「矢作川研究 No. 4」も多くの研究報告を頂き発行することができました。大変お忙しいなか執筆から校正まで熱心にご努力いただきました執筆者の皆様をはじめ、本書発行にご協力いただきました方々には心より御礼申し上げます。

2000年3月15日

矢作川研究編集委員

村山志郎・宮田昌和